

書 評

シリーズ 未来社会をデザインするⅡ 認識と行動の地球環境学

谷口真人編

出版社：古今書院 発行年：2025 年 10 月 30 日
価格：3,600 円＋税 ISBN：978-4-7722-8129-4

シリーズ「未来社会をデザインする」は、人と社会と自然の分断を解消する方策を学際的に模索する意欲的な試みである。その 2 冊目にある本書では、人の行動変容に着目し、経済学、行動心理学、生命科学、生態学、社会福祉学、法学、脳科学、知識情報学、情報学といった異なるアプローチの知見を束ねている。行動変容を進める現場の課題に対して、提供されている知見を組み合わせ活用することが可能である。

例えば、行動変容を促す政策手法でいえば、規制的手法は法学、経済的手法は経済学、情報提供や普及啓発は知識情報学の知見が活用可能である。また、経験を経た個々の学習や集団としての文化が行動変容を支える基盤的な規定要因として重要である。自然との関わりの喪失や共感・想像力の減退、AI 社会における人のあり方など、現代的課題を多角的に問う点も興味深い。

評者の印象に残った論点を 3 点あげる。

第 1 に、環境配慮行動の定義とその多義性の整理である。環境保全を意図せずとも結果的に環境負荷を減らす無意識的行動があるという指摘は、人の内発的学習や価値形成の重要性を改めて示唆する。

第 2 に、地球環境問題というマクロな課題と日常的関心の乖離が政策受容を妨げている分析である。国政を担う層が災害影響を受けにくい立場にあるとの指摘は鋭く、これを是正するには市民主導の先進的取組（ミクロ）と、予防原則・環境正義の制度化（メゾ）の両輪が必要である。

第 3 に、AI 社会における人間の認知変容が示唆される。知識の洪水の中で AI と一体化することで、個人は単一の自我から、複数の場や関係に応じて異なる人格をもつ「分人」へと変化していく。

本書に示された理論的知見の深化にもかかわらず、日本社会では気候変動への関心と行動の低下が顕著である。いまや「意識の非常事態」ともいえる現状に対し、本書の多面的な知見が行動変容の実践にいかにつくか、その展開に大きな期待を寄せたい。

武蔵野大学工学部サステナビリティ学科 白井信雄